

公益財団法人やまがた教育振興財団

「教員養成に関する調査研究事業」

報 告 書

「母語への気づき」を育成する教育の研究

令和7年4月30日

山形大学地域教育文化学部

講師 大高 茜

1. 研究の目的

本研究は、関西大学の天津由紀雄教授による英語教育関連の研究から着想を得たものである。天津教授の著書等から本研究の着想に関わった点を抜粋し、まとめると、次のようになる：

- (1) 「教育にとって、ことばとの関連で重要なのは、ことばのもつさまざまな性質について気づくこと、意識することを支援する[こと]」(天津 2012: 29) である¹
- (2) 「ことばのもつさまざまな性質について気づくこと、意識すること」、すなわち、「ことばを対象としたメタ認知」(天津 2025) を「ことばへの気づき」と呼ぶ
- (3) 「知らない間に身につき、その正体を意識することもなく、また、使うときにもほとんど意識することもない母語というものの存在に気づかせ、さらには、その性質に気づかせ[る]」(天津 2012: 29) (母語を対象としたメタ認知、本研究でいう「母語への気づき」を育てる) ためには、外国語学習を通して、母語を相対化させることが必要である
- (4) 「外国語学習の第一義的意義は母語を相対化するための手段を手に入れること」(天津 2012: 26) である
- (5) 「小学校段階で児童の母語である日本語を対象とした、メタ言語能力養成のための言語教育を実施すべき」(天津 2021: 73) である

現行の学習指導要領には上記のような天津教授の考えを反映したと思われる部分がある。² 下記は、小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説「外国語活動・外国語編」からの抜粋である：

- (6) 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと(外国語活動の目標及び内容より)
- (7) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解する[こと](外国語科の目標より)

このように、「外国語(学習)を用いた母語の相対化」、そしてそれを踏まえた「母語への気づきの育成」は、外国語活動・外国語科の目標の一つとして学習指導要領に取り上げられているが、それにもかかわらず、その重要性への理解や実践に向けた取り組みは十分な拡がりを見せていない。³ 本研究は、このような現状の背景にある問題について明らかにすることを目的として、以下に述べるような文献調査、インタビュー調査を行った。

まず、このような現状の背景にある問題の一つとして、上記のような外国語活動・外国語科の目標が周知されていない可能性を考え、これらの目標がどのように教科書に反映されているかを調査した。次節で述べるように、この調査により、教科書の中に「母語の相対化」に資するような教材はあるものの、その数は少なく、簡素なものであることが明らかになった。

調査後、当初の計画では、新たに「母語の相対化」「母語への気づきの育成」のための教

¹ 本研究(あるいは生成文法)における「ことば」とは、ある個別言語と他の個別言語との共通の基盤のことである。

² 天津教授の著書(天津 2021: 27, 28)を参照のこと。

³ この点については、天津教授も指摘している通りである(天津 2021: 29)。

材を作成する予定であった。しかし、そのような教材はすでに十分に考案されていること（大津・窪園 2018、大津・浦谷・齋藤 2019）等を踏まえ、当初の計画を変更し、「母語の相対化」「母語への気づきの育成」の重要性への理解が広がらない根本的な理由、つまり、学習指導要領の目標が周知されていないことの他に、どのような問題が考えられるのかについて、文献調査や、大津教授、広島大学の深澤清治教授へのインタビュー調査等を通して考察を深めることにした。次節で述べるように、調査の結果、母語や外国語に関する話者のある錯覚が関与している可能性が明らかになった。

2. 研究成果

先に述べた通り、本研究ではまず、「外国語（学習）を用いた母語の相対化」に関する外国語活動・外国語科の目標が、どのように教科書に反映されているかについて調査した。調査には、山形県が発表している県内での教科書採択結果をもとに、2社の教科書を使用した。⁴ 2社の教科書には、「母語の相対化」に資するような教材は含まれてはいたものの、その数は少なく、内容も、ほんの数例の文や単語をもとに英語と日本語の性質の違いを示すような簡素なものであった。また、教科書内での教材の位置付けも付随的なものであり、ユニットの中心ではなく、終わりの部分に小さく掲載されているものがほとんどであった。

しかし、研究を進める中で、学習指導要領の目標が教科書等を通して周知されていないこと以前に、母語話者が陥るある錯覚が、「母語の相対化」「母語への気づきの育成」の重要性への理解を阻んでいる可能性が明らかになった。この点について詳しく述べる前に、「母語への気づきの育成」が重要である理由について、大津教授の著書に基づき整理する（大津 2021、他）：⁵

- (8) 「母語への気づき」を高めることによって、母語の効果的な運用が可能になる：
例えば、母語の仕組みや性質がわかれば、「リンゴとナシを4個買ってきてね」といった曖昧な表現（リンゴとナシを合わせて4個なのか、リンゴ（1個）とナシを4個なのかかわからない表現）の曖昧性に気づき、曖昧性のない的確な表現を作り出すことができるようになる（「リンゴとナシを2個ずつ買ってきてね」「リンゴを1個と、ナシを4個買ってきてね」）（例は大津 2009: 315 より）
- (9) 外国語学習の基盤を作ることができる：
外国語の語順、語のまとまり（句）、節、文の埋め込み（主節と従属節）、主語、目的語、品詞、人称、数、性、時制、修飾などの概念を含む文法的説明を受け入れる準備ができる（大津 2009: 313）
- (10) 母語の面白さ、豊かさ、怖さに気づくことができる

大津教授は、著書や本研究に際したインタビューの中で、上記のような重要性が認識されにくい理由の一つとして、「母語を知っている」ということと「母語について知っている」ということが混同されているという点を挙げている。例えば、日本語を母語とする、「日本

⁴ 山形県内での教科書採択結果については、<https://www.pref.yamagata.jp/700012/kyokasyo/saitakukankai.html> を参照のこと。

⁵ 紙幅の都合上、ここには大津教授が挙げている理由のうち、一部のみを掲載している。詳しくは、大津（2021）を参照のこと。

語を知っている」者にとっては、助詞の「-は」と「-が」の使い分けは直感的に捉えることができるものである。しかし、なぜ普段使い分けしているように使い分けしているのかということは説明できない（例は大津 2012: 27; 28 より）。つまり、「日本語を知っている」者でも日本語については知らないのである。しかし、「日本語を知っている」者は「自分は日本語の専門家だ」という錯覚に陥りやすく、その結果、日本語の仕組みや性質への理解を深めることの重要性に気づくことが困難になる。

似たような理由から生じる誤解に、「言語はコミュニケーションのためにある」「言語の機能の方が形式よりも重要である」（従って形式を理解する必要はない）といったものがある。このような誤解の所在については、本学の学生との対話を通して気付いたものであるが、本学の学生に限らず、世間一般に母語や外国語に関してこのような誤解があるように思われる。しかし、もし言語がコミュニケーションのためにあるのであれば、そもそもコミュニケーションの場面で、その障害となるような曖昧な表現（例えば「リンゴとナシを4個買ってきてね」）等は用いられないはずである。⁶ また、言語の機能を発揮させるためには（例えばコミュニケーションを効果的に行うためには）、上記の通り、言語の形式（仕組みや性質）を理解することが不可欠であり、例えば、「リンゴとナシを4個買ってきてね」という表現を曖昧性のないものに言い換えることは、ただ日本語をランダムに聞いたり話したりしているだけでは不可能である。このことは、母語だけでなく、外国語にも当てはまることであり、ただ外国語を耳にしているだけでは、表面的な規則性だけしか把握することができないのである（大津 2025）。

以上のように、文献調査と大津教授へのインタビュー調査から、「自分はことばの専門家である」という錯覚により、「母語の相対化」「母語への気づきの育成」の重要性への理解が阻まれている可能性が明らかになった。

3. 今後の取組及び期待される効果

以上の調査結果から、喫緊の課題として、「自分はことばの専門家である」という錯覚や、外国語も（母語のように）無意識に獲得されるという世間一般の誤解を解消することが挙げられる。その上で、「母語への気づきの育成」の重要性への理解を促すとともに、実践に向けた取り組みを行う必要がある。

母語、外国語を用いた「ことばへの気づき」の育成の実践において、どのようなことばの仕組み、性質に焦点を当てるべきかという点については、大津教授、深澤教授ともに今後検討が必要であると指摘していた（大津 2025、深澤 2025）。例えば、「どの語とどの語がまとまりをなし、主語として働いているか」について意識することは、母語と外国語との共通性を理解する上では重要であるが、大津教授は、このような言語の共通の基盤を理解することは児童には困難であるため、初期段階では強調しすぎないことが重要であると指摘していた（大津 2025）。メタ認知の発達度合いに応じて、言語のより細かい仕組みや性質への気づきを高めていくのがよいということである。これに関連して、深澤教授は、メタ認知の発達が進んだ中学校や高等学校においても、特に完了・進行（相）や仮定（法）などの抽象的な概念について取り上げる際には、詳細な場面設定等の工夫が必要であると指摘していた（深

⁶ この点については、池内（2010）を参照のこと。

澤 2025)。

また、深澤教授は、スコアが上がったことをもって外国語学習が達成されたと評価するのではなく、母語と外国語の（あるいは個別文化の）共通性や個別性に少しでも気づくことができれば、それを考慮して評価をするべきであると指摘していた（深澤 2025）。知識や技能の習得を目指すだけでなく、人間的な成長を目指すという外国語教育のあり方についても、今後検討が必要であろう。

一連の取り組みが実践されれば、メタ言語能力の向上が期待されるとともに、外国語教育のあり方そのものについても再考の契機となるだろう。

4. まとめ

以上のように、本研究では、「外国語（学習）を用いた母語の相対化」、そしてそれを踏まえた「母語への気づきの育成」に焦点を当てた。「母語の相対化」については、外国語活動・外国語科の目標の一つとして学習指導要領に取り上げられているが、それにもかかわらず、その重要性への理解や実践に向けた取り組みは十分な拡がりを見せていない。本研究は、このような現状の背景にある問題について明らかにすることを目的として、文献調査と、大津由紀雄教授、深澤清治教授へのインタビュー調査を行った。現時点で十分な理解や解釈ができていない点、本報告書に含めることができなかった部分については、次稿以降に改めて論じることしたい。

謝辞

大津教授、深澤教授には、貴重なお時間を割いてインタビュー調査に応じて頂き、深甚なる敬意と謝意を表します。また、助成を頂いたやまがた教育振興財団に感謝申し上げます。

インタビュー

大津由紀雄教授（2025年2月13日）

深澤清治教授（2025年3月14日）

参考文献

- 池内正幸（2010）『ひとのことばの起源と進化』開拓社。
- 大津由紀雄（2009）「第16章 ことばと教育の関連をさぐる」『はじめて学ぶ言語学 ことばの世界をさぐる 17章』、大津由紀雄（編著）、ミネルヴァ書房。
- 大津由紀雄（2012）『「ことばへの気づき」を育てる－小学生にとっての英語を考える』佐藤学内田伸子 大津由紀雄が語る ことばの学び、英語の学び』ラボ教育センター。
- 大津由紀雄（2021）「小学校英語の本質を掘り下げ、言語教育の未来を拓こう」『どうする、小学校英語？ 狂騒曲のあとさき』、大津由紀雄・亙理陽一（編著）、慶應義塾大学出版会。
- 大津由紀雄（2021）「公立小学校での英語教育－必要性なし、益なし、害あり、よって廃すべし」『どうする、小学校英語？ 狂騒曲のあとさき』、大津由紀雄・亙理陽一（編著）、慶應義塾大学出版会。
- 大津由紀雄・浦谷淳子・齋藤菊枝（編）（2019）『日本語からはじめる小学校英語』開拓社。
- 大津由紀雄・窪蘭晴夫（2018）『ことばの力を育む』慶應義塾大学出版会。
- 深澤清治（2014）『教師教育講座 第16巻 中等英語教育』協同出版。
- 三浦省五・深澤清治（編著）（2011）『新しい学びを拓く 英語科授業の理論と実践』ミネルヴァ書房。
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「外国語活動・外国語編」』。